―所蔵資料の紹介―

正岡容（まさおかいるる）宛相馬御風書簡

この資料の登録名は、「坪内逍遥宛相馬御風書簡」（差出日不明、封筒なし・墨書・罫紙5枚）ですが、検証していくと年代に矛盾がみられます。

まず、御風が「左眼ほとんど失明」状態になるのは、昭和21年春以降のことです。また、泉鏡花とは雑誌「白百合」同人時代（早稲田大学在学中）の明治36年に会っているので、文中の「四十五年前？」が正しければ、昭和24年頃となります。

いずれにしても、逍遥は昭和10年2月18日に逝去しているので、年代が合いません。

では誰に宛てた書簡なのでしょうか。考察の結果、タイトルのとおり、東京出身の芸能研究家で作家の正岡容（明治37年～昭和33年）に宛てたものと推定しました。

書簡の趣旨は、御風が「熱望」した「ご高著二冊」受贈の礼とその感想です。御風が列記する人物――坂井久良伎、永井荷風、藤蔭静枝、竹久夢二、直木三十五、田山花袋、徳田秋声などを網羅し、かつ昭和24年前後に出版された本は、容の著作『荷風前後』（昭23・11・20・好江書房）、『東京恋慕帖』（昭23・12・20・好江書房）のほかに見あたりません。

当館所蔵の昭和24年2月19日付の御風宛容書簡には、「御懇信及金円辱く拝受～小著のこと但此ハ二冊つゝしんで作者から献本させて下さい」とあり、次便（同年3月吉日付）に「『荷風前后』校正手ちがひにて個（ママ）有名詞誤植多く…」と記されています。

さらに、御風一人雑誌「野を歩む者」（昭和24年5月）に、「正岡容氏の『東京恋慕帖』といふのを贈られて病間ゆる〳〵読んでそぞろに自分の住んでゐた頃の東京を追慕した」とあることから、容が贈呈した「二冊」が判明し、つじつまが合ってきます。

以上のことから、書簡の差出日は昭和24年3月上旬と推定しました。筆跡からしても、御風最晩年のものに相違ありません。

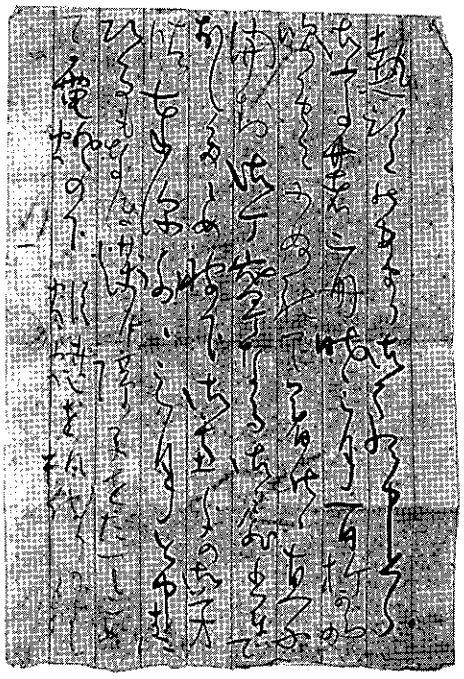
次に、内容では「お須磨さんにせがまれてカチューシャの唄つくり候頃」の一文が興味を引きます。

「カチューシャの唄」は、大正3年の芸術座第三回公演「復活」で松井須磨子が歌って大ヒットした劇中歌。御風が恩師の島村抱月に命じられて二節から五節までを作詞した（一節は抱月による）――というのが定説ですが、まるで御風が須磨子に直接頼まれたような、しかも親しげな書きぶりです。

須磨子は芸術座の花形女優、御風は幹事であり、二人は言わば〝同志〟でしたから、親交があっても不思議ではありません。

しかし、妻子ある抱月との恋愛問題やわがままな言動で一座の足並みを乱したといわれる須磨子に対して、御風は好意を抱いておらず、このことが糸魚川退住の一因にもなっている――との見解が大勢を占める中、意外な印象を受けます。

なお、この書簡は、御風息女の相馬文子さん（平成21年10月8日逝去）からの寄贈資料であり、入手経路等の詳細は分かっていません。



正岡容宛相馬御風書簡（1枚目）

釈文　書簡の全文

熱望のあまり御願申上候御高著二冊昨三月一日折からの吹雪にぬれて着仕候直に開封御丁寧なる御扉書までおしたゝめ被下御恵与の御芳情奉深謝候

三月と申すにひるもなほ煤け障子をたてこめて電灯の下炬燵を机代りに致しこの読書の滋味又かく別に御座候

左眼ほとんど失明の為読書まことに困難に御座候へ共読みたしとおもふ書物に読みふけり候よろこびには代へがたく候

お須磨さんにせがまれてカチューシャの唄つくり候頃のおもひでをはじめとして三十余年前のなつかしきおもひであまりに繁くして昨夜はいさゝか感情たかぶりすぎしやうにて今日なほ夢見心地に拝読をつゞけ居申候

いづれ御高著によりてよびさまされ候おもひでのかずかずそのうち一文にまとめ申度存居候

その節ハ改めて供貴覧申すべく候

久良伎翁をはじめ荷風翁、静枝女史、剣花坊、竹久夢二、直木三十五、紅蓮さん、幹彦君　花袋、秋声、秋江、いずれも因縁浅からざりし諸士に有之おもひで限りなき事に御座候

泉鏡花は中学生の頃より心酔、四十五年前？早稲田の学生時代に花房柳外と申す先輩にして（この人は明治三十八年か九年に亡くなり申候）

親友たりし人につれられてはじめてお訪ね致候折の事など今なほありゝとおも描かれ候事に御座候

藤蔭静枝さんにはじめてお目にかゝりしもこの日その帰りみちに御座候

爾後久しく……

※以降不明